

## 32 成 高 寺

伝承地：埴田4丁目3-7

参考書籍：1・4・6～7



(成高寺本堂)

埴田町の名刹成高寺は、文明18年(1486)、宇都宮城17代城主成綱によって建立された。

宇都宮氏滅亡と共に衰微したが、元禄時代になって寺運を回復した。しかし戊辰の役で兵火をこうむり、諸堂寺宝類を焼失してしまった。

この由緒ある成高寺には数多くと言い伝えがあるが、その中で特に名高い「成高寺の天狗」・「狐の詫証文」・「啓誓禅師の不覚」の三つをとりあげる。

### 1 成高寺の天狗

明応9年(1500)3月、第4世の住職に天英祥禪と呼ぶ書のうまい住職がおりました。ある夜、住職の夢に一人の老翁が現われ「自分は今夜高原山によじ登り、神仙と揮毫する約束を結んだがまだ書法に通じていない。幸いに師はその道の大家と聞いている。しばらくの間その手腕を貸されたい。」と、貞禪に語りました。貞禪も最初は極力これを断ったが、やむを得ずこれを承諾すると、たちまち右手がしびれて自由を失ってしまいました。不思議に思っていると、3日の後の夜半に老翁は再び姿を現わして「おかげで面目を保ち得た。長く当山の守護をして必ず師恩に報いよう。」と、述べて姿を消すと、自由を失っていた手は再びもとのように自由に動かせるようになりました。

当寺にある天狗はこの老翁の像を刻んだもので、霊験あらたかなので多くの信者でにぎわっています。

### 2 狐の詫証文

この話も成高寺第4世、天英祥貞禪師の話です。当時の成高寺は、女人禁制で、寺男が寺内の仕事を全て行っていました。そのころ、新左衛門という寺男と二人で暮らしていました。

ある時、檀家の法事に出かけ帰ってみると、いつも出向かえてくれる寺男の爺やがみあたりません。あちこちさがしまわると、竹やぶの中から大きなイビキが聞こえるので、不思議に思って近づいてみました。すると、年老いた大狐が寺男の着物を着て昼寝をしていました。

和尚は、夕方に爺やを呼んで、「爺や、お前は、寺のため、またわたしのために、大変よく働いてくれました。しかし、今日、お前の正体を見てしまったので、今日限り出て行って欲しい。」という。狐は、驚いて、涙を流しながら「今後は絶対に正体を見せるようなことはいたしません。このお寺に仕えてから、私は、楽しい思い出でいっぱいです。どうか、今まで以上に一生懸命働きますので、終生置いてください。」と頼みました。和尚は、かわいそうになり、「それなら今いったことを書いて出さない。」と書いて証文を書かせました。狐の新左衛門は、死ぬまで寺の

ため、和尚のためによく働きました。そこで、和尚は、「新左衛門稻荷」として祀り、その恩に報いました。また、その時に書かせた証文は、今でも成高寺に残されています。

### 3 啓蟄禅師の不覚

成高寺9世の啓蟄禅師は、宇都宮城主の家臣である君島氏の子でしたが、名僧として多くの人々の信頼を受けていました。禅師は光明寺を開山する時に、その用材として、明神山の杉の木を伐採しました。そこで多くの人々は「明神様の怒りがあるのでは…。」とってうわさしあいました。

ある日、近くに住む一人の老夫が、田を耕し、疲れがひどいので、田の畔のところで、うたた寝をしていると、夢の中に白衣をつけた社人一人が現われ、「啓蟄和尚は、神木を勝手に伐採しているので神罰を下そうと思うが、大変学職の高い名僧なので、天帝に告げて梵天王の許しを受けてから処罰するつもりである。そこで、今から天まで使いに行くので汝の白馬を借して欲しい。」とって姿を消したので、急いで家に戻り厩を見ると白馬の姿はどこにもみあたりませんでした。

翌朝、厩に行ってみると、白馬が大汗をかいて息づかいを荒くしていました。この不思議な出来事を啓蟄禅師に告げると、老夫は気を失ってしまいました。

和尚は、「こうなれば、仏の助けを借りる以外に道はない。」とって、それから昼夜を問わず勤行に励みました。

ある雨の日、茶の間で、茶を飲みながら、お客さんと話をしていると、不覚にもうとうと寝入ってしまいました。すると、その夢の中、装束した者が現われて、「我は梵天王の使いの韋駄天である。汝、勝手に二荒の神の木を伐り不届である。汝の命を絶つようと勅命を受けて来たが、汝の身の内に経文が満ちていて矢を射ることができなかった。今日こそ思い知れ。」とって一矢射ると、その矢が足の甲に当たったところで、夢からさめました。

驚いてとび起き、まわりを見回しましたが、だれもいません。「ついに心の中にすきをつくり、勤行を怠ってしまった。」とってとても残念がりました。

しかし、そのまま遷化することができたということです。

